



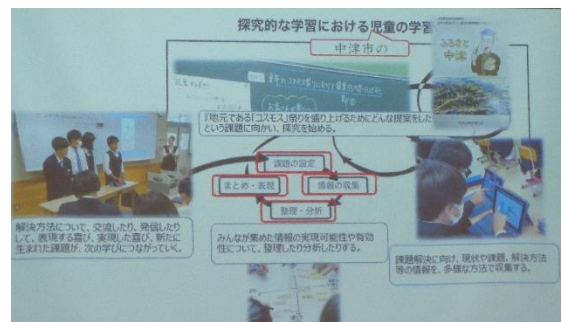
■ 2024. 4. 13 「学び、考える教育」ワークショップ — 学びの里中津と北欧教育 —

新中津市学校の会場は、60人を超える参加者で満員となった。

今回のワークショップは、日本の現場と北欧デンマークの現場、教育をそれぞれ紹介し学び合う企画。

最初に、中津市教育委員会の川口陽氏（学校教育課学校指導係主幹）から、総合的学習（探究）について、中津市独自の工夫を重ね、着実に進めている現状の報告があった。

昔の世代には経験のないカリキュラムフリーの教科であるが、従来型の覚えること一辺倒に近かった学び方から、そこに自ら考える学習をくみ合わせた重要な学習時間である。



来日中の Educational Visits Denmark チーム、デンマークで子どもの生活教育を指導する専門職種の Mads Albertsen（マッズ・アルバートスン）氏とコペンハーゲン大学で心理学博士を修めた海野アユミ氏はパートナー、6歳になる娘さんも同行。



デンマークの家庭では、子どもも、マッズと親を名前と呼ぶ。対等の精神だという。正に、北欧教育の原点。

デンマークは人口 590 万人、北海道とほぼ同じ人口で、面積は北海道の半分。
産業構造はどうだろうか。

2022 年 産業構造 (OECD)	産業比較	
	日 本	デンマーク
1 次産業	1.0%	1.3%
2 次産業	27.1%	22.3%
3 次産業	71.9%	76.4%
計	100.0%	100.0%

デンマークの 2 次産業比率は 1/4 以下、3 次産業は 3/4 を超えている。
明らかに、21 世紀型産業構造である。

1 次産業比率は 1.3% と低いですが、穀物自給率は 125%、かつ酪農産物などで高付加価値産出も維持している。労働生産性は世界第 4 位（日本 30 位）、幸福度は世界 1 位の国。

人魚姫、アンデルセンの故郷、チーズ酪農などとはかけ離れた先進産業国家である。
国連が発表する世界電子政府ランキング（隔年）で、2018 年と 2020 年、連続世界 1 位のハイテク国家でもある。

ハイテク国家になるには、どうすればよいのか、興味深い。

デンマークチームは、マッズ氏のプレゼンテーションに始まり、アユミ氏による日本語、および補足の解説で進む。

学びは、方向性も制約も与えない。

課題に対して、子供たちにそれぞれの考えを述べさせる。

課題は、指導者が出すときもあれば、子供たちにも提案させる。

基本的に、宿題はない。

1 時間経ったころ、マッズ氏が急に、皆さん立ち上がって、席を離れ、日ごろ話したことのない方がたと話しあってください、と提案。

5 分ばかり経過して、立ち話は、どんどん盛り上がり、皆なかなか席に戻らない。

よくあるワイガヤ対話なのに、どこか違う。

後で気付いたことは、日ごろやるワイガヤは結局、仲間同士。

今回は、それぞれ仕事も立場も違う人同士で新鮮だったのではないかな。

このシンプルな事例からも、私たちは、いつもの仲間うちでの一律性の世界から抜け出せていないことに気づく。



たしかにマズズ氏が強調したなかに、多様性の尊重があった。
対等の精神から多様性は生まれる。
同質性の中から、イノベーションや異能を生むだすことは、至難の技だ。
頭ではわかっている。
まずやってみることだ。
現実の方法論への愚直な取り組みが大切なのだ。



ここまできて、ち密に準備された日本型学びと、どちらが良い悪いではない、あきらかな相違を感じる。

はからずも、今回のように、共通の関心事をもちながら、10代から80代まで、学生から社会人卒業生まで、学校の先生とも、井戸端会議のように会話できる機会がなかなかないことに気づかされる。

経験を重ねながら、このような場面をさらに作っていく必要を痛感させられた。

【アンケート調査】 <https://theoutlook-foundation.org/wp-content/uploads/2024/04/nakatsulearningworkshop.pdf>